

和田 敦彦著

書物の日米関係

リテラシー史に向けて

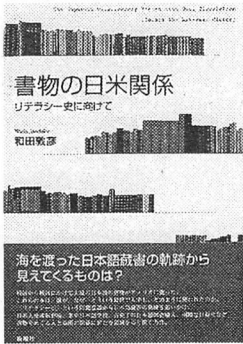
ワシントンの国会図書館
で、拙著を検索したことが
ある。カード方式だったが、
『わたしの中のベトナム戦
争』がまさきに出た。ベト
ナム戦争中、わたしには
ヒザが交付されなかった。
怒るべきか、言論の自由
に感心するべきか、複雑
な気持ちにたどられた。
入国に関するエール大学
の研究会に出たら、同じ
憂き目に会っているガル
シア・マルケスが「本が
自由に読める、生身の人間
がエル・パソの橋を渡れ
ないとは」と笑ったとき
は、かれは以来米国に入
国していないはずだ。そ
ういうわけでは、本の
本がどのようになっている
か、メリカにわたるのか
わたしは常に抱き続け
てきた。

若い世代の和
田敦彦の大作
(厳密には邦書
の渡米史だが)
は、学術的研究
が、同時に、生
身の人間の生き
様が伝わる日米
文化リテラシー
史である。

生身の人間の生き様が伝わる

日米文化リテラシー史の力作

小中 陽太郎



A5判・406頁・4935円
新曜社
978-4-7885-1036-4

れ以前には明治25年に渡米部の大学から西海岸、中央したエールの朝河貫一が30年代、ハーバートとコロンビアには角田柳作がいた。この3人が最も重要な人間であるらしい。しかしどうやって目録を作るのかが、漢籍との違いをどう説明するか、はげしい論戦が交わされている。著者は、それを当時の手紙を元に読くと地下が5階におよぶ図書館の目録をしのばせる。

第4・5章
が、占領期である。この時期の研究には、著者と同じ早稲田の鹿野政直による

議会図書館調査や松浦総三の接収文書を巡る調査がおこなわれた。ここでは一世の協力と二世のアンビバレンツな対応にまで筆が及んでいる。二世のいだいた違和感、サイドの提起したオリエンタリズムに通ずるものかもしれない。

第6章で、一転、分類と棚のたたかいに戻っていく。第7章で、日本語図書館は、軍事、安全保障といかに密接に関係するかが改めて示される。第8章では電子データとしての書物に目を配るが、そのとき「書物から剥がれ落ちてゆくもの」に哀惜の念をのこしつつ、本書は終章へと突入するのである。2003年にも三井住友金融経済研究所から6万5千冊もの財政学の蔵書がピッツバーグ大学に寄贈されているが、その経緯は紙媒体の記録にはない。

07. 5/11 読書人

丹念な調査と文学的筆致をかね備えた研究といえよう。(こなか・ようたろう氏)作家、名古屋経済大学短期大学部客員教授

★わた・あつこ氏は早稲田大学助教授・日本近代文学専攻。早大学院博士課程単位取得退学。著書に「読むこと」「メディアの中の読者」「ディスカールの帝国」(共著)など。一九六五(昭和40)年生。